

グローバル化する中国を見つめて ——村田雄二郎先生を送る——

増 田 一 夫

うろたえるような出来事が時折起こる。村田雄二郎先生のご退職もそのひとつだ。私から見ると時系列の逆転にほかならない。しかも、自分の退職時に「送る言葉」を依頼しようと思っていた当の同僚かつ友に、逆指名を受けてしまった。心に沁みるような信頼ではあるが、応えるためには、まずこの動揺を収めなければならない。元来冷静には程遠い人間にとってはむずかしい注文だ。もっとも、私より3学年お若い村田先生は、駒場のスタッフとしては5年も先輩である。その視点に立てば、時系列の逆転は消滅する。私の後を継いで地域文化研究学科長(当時)、地域文化研究専攻長を務められたため、私のうちに逆転の印象が生じたにすぎないと割り切ることにしよう。

『三国志演義』によれば、劉備は腕が長く膝に届いた。また、福耳のあまり自分の耳朶が見えた。名高い例があるためか、中国の物語には風貌の記述が多いと私は思い込んでいる。その思い込みと、文章を書く際に襲ってくる「告白の衝動」(Th. Reik)に屈して打ち明けるならば、村田先生は、私のなかでは駒場に着任する頃から「冷凍光線」という表現に結びついていた。ある中国研究者から聞いた表現である。わが専攻には無縁の人物だとすぐに付言しておこう。別の方にあらぬ嫌疑がかかっては申し訳ない。「冷凍光線」は、眼光が鋭いゆえに付いた渾名だという。ここで第二の告白をするならば、会議中などにふとその語が浮ぶと、そのつど村田先生の顔を盗み見て、その評の当否を確認しようとしたものである。もちろん、光線が発射される決定的瞬間を期待しながら。しかし、君子たるものはかくあろうかという面に不要な喜怒哀楽は現れず、「冷凍光線」を目撃することはついになかった。

他方で、明らかな喜や楽の表情は目撃したことがある。最も印象に残るのは、会議からも駒場からも遠く離れた場所での表情である。かつて、大学院重点化の書類作成に倦みはてた若手教員たち——われわれのことである——は、*gaya scienza*を渴望するあまり共同研究を立ち上げた。人呼んで「クレオール科研」。そして、1995年暮れから翌年の正月明けまで、何人かでカリブ地域へと調査に出た。村田先生と私以外には、こちらも今年度をもって退職される高橋均先生、さらに木村秀雄、足立信彦両先生、後に遠藤泰生先生が加わった。冬なお熱い陽光のもとで、村田先生は満面の笑みを湛えられていた。「破顔」とはあのようなことを言うのだろう。君子の面が割れ、親しむべき友の顔が現れ

た瞬間である。そのとき、なぜか、「凍結」の意味論が持ち出され、他のメンバーが、「解凍した」、「融けた」と村田先生を嘲したのを覚えている。

その後、帰国への経由地であるニューヨークへと飛ぶと、カリブとの気温差40度余の世界だった。Blizzard of 1996なる豪雪の襲来で、摩天楼の街で足止めを食らうことになった。帰国が遅れる旨をホテルの便箋に認め、ファックスでの送信を依頼するために村田先生とフロントまで下りたのではなかったか。駒場では、「あの連中は、水着で雪合戦に興じているらしい」という噂が流布されたそうである。もちろん、調査旅行に水着など持って行くはずもない。だが、肝心なのはそこではなく、極寒のニューヨークでも村田先生の表情が凍り付くことはなかったという点である。

村田先生とは、西アフリカにも行った。一連の共同調査が、参加者たちの視点をグローバル化する効果を持ったのは間違いない。それは、ハーバード・イエンティン研究所での滞在と同じぐらい、村田先生の学風形成にも貢献したと断言してしまおう。目まぐるしく変化する中国。村田先生が東京大学に入学された1976年、毛沢東が死去する。鄧小平の登場、天安門事件、香港返還、世界の工場へ、そして経済大国へ、さらなる軍事大国へ……。アメリカの不安定な舵取りに乗じて、中国のグローバルなプレゼンスはさらに増大するに違いない。村田先生は激動する中国を見守られた。哲学・思想から出発し、政治思想や政治制度へ、そしてナショナリズムやマイノリティの考察へ。しかし、なんと精力的な活動だろうか！『漢字圏の近代』、『リベラリズムの中国』、『シリーズ 20世紀中国史』、『新編 原典中国近代思想史』、『日中の120年 文芸・評論作品選』などで主導的な役割を演じていらっしゃる。それらは、外界と孤絶した書齋での研究ではなく、多様な研究者との交流、そしてなによりも、モンゴル、チベット、四川などを巡り、中国の実像と多様性を渉猟する姿勢、地域文化研究者の面目躍如たる姿勢から得られた成果である。そして、そのすべてを支えるのが、あの冷静なる面からは読み取りがたい、並々ならぬ情熱であった。

控えめな偉人の、学内行政等における事績は人目に映るよりもはるかに大きい。しかし、ここでは割愛せざるをえない。

その村田先生が、定年まで5年を余して駒場を去られる。研究から離れるためではなく、その慧眼でもって、より長く中国を見つめるために。駒場でのご活動に深い謝意を表し、今後のさらなるご活躍を心からお祈りしたい。

そう言えば、村田先生が駒場でとてもにこやかにされたことがあるのを思い出した。一度は、京劇の劇団がやってきた際に、顔に白い化粧をし、宦官の衣装で出演されたとき。これが実に似合っていた。もう一度は、四川から少しスリムになって帰られたとき。「辛い料理は痩せる」とのことで、消化器官の大部分を踏破した食物が、なおもたらず感觸を笑顔で説明して下さった。ぜひ、いつか四川にお供して、その激熱の食物を経験したいと思ったものである。その願望の実現は、まだ可能なのかもしれないが。